

Hukutana

June 2000

No. 15

2000年 6月

ふくたな

1... 鳥山寛 TORIYAMA Kan

ケニア西部における悪性腫瘍の分布とその特徴

Characteristic Ethnogeographic Distributions of Malignant Tumors in Western Kenya

6... 菊地美貴子 KIKUCHI Mikiko

「ヒダド・ママ」の復活～レンディーレと暮らして見えてきたこと～

4... 追悼 安部さん Obituary of Professor ABE

山極寿一 YAMAGIWA Juichi

5... センター行事/センター往来

9... 早魃情報、マラリア情報

10... 編集後記 Editor's Note

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュースレター

Medical Research in Kenya

ケニア西部における悪性腫瘍の分布とその特徴

鳥山 寛 (長崎大学・熱帯医学研究所・病変発現機序分野)

いわゆる熱帯病と言われ、赤道をはさんだ低緯度地域にほぼ限局して存在する地方病をはじめとし、感染性疾患、腫瘍性疾患などの多くの疾患には特徴ある地理的あるいは民族的分布が認められ、これらの疾患の分布はもとより、発生およびその発現形態に関与する要因として以下のような様々な因子が考えられる。

A. 外的因子

1. 自然環境：風土、気候、気象など
2. 生物学的環境：病原体および媒介生物の生存に適した、あるいは不適な環境
3. 物理的ならびに化学的環境：紫外線、化学物質の汚染など
4. 社会的環境：生活環境（食、栄養状態、住、衛生状態、性、職業、宗教、医療環境など）、風俗習慣（入れ墨、割礼、抜歯など）、嗜好習慣（飲酒、喫煙など）など

B. 内的因子

遺伝的素因（個体が先天的に保持しているもの；

遺伝子の異常など）

これらの因子は単独で個体に影響を与えるのではなく、実際には複数の因子が複雑に絡み合って関与しているものと考えられる。また、当然のことながら、これらの因子、とくに外的因子は決して固定化されたものではなく住民を取り囲む社会環境、生活環境の移り変わりにつれ、時代とともに変化していくことも間違いない。しかしながら、アフリカを主とした熱帯地域の開発途上国においては、疾患そのものが人為的に修飾されずに、比較的原初の状態でも存在することも少なくないと思われる。すなわち、これらの地域においては、先進諸国に比べ、自然環境、生活様式、風俗習慣などの外的因子が疾患の発生、分布およびその病態により大きな影響を与えているものと考えられる。

長崎大学・熱帯医学研究所・病変発現機序分野（病理学部門）では1970年代初頭のOTCA（JICAの前身）によるケニア共和国、ナクルでの医療協力プロジェクトへの参加を契機とし、ケニア、ザイール、タンザニア、ウガンダにおいて主として熱帯性疾患を対象に疫学および病理組織学的調査、研究を継続しておこなっている。

表1 西ケニアにおける悪性腫瘍の主な種類、件数および頻度
Numbers and Prevalences of Main Malignant Tumors in Western Kenya

1. 子宮頸癌	uterine cervix cancer	1,806	(21.6%)
2. 悪性リンパ腫	malignant lymphoma	1,069	(12.8%)
3. 皮膚癌	skin cancer	954	(11.4%)
4. 悪性軟部組織腫瘍	malignant soft tissue tumor	607	(7.2%)
5. 乳癌	breast cancer	570	(6.8%)
6. 悪性黒色腫	malignant melanoma	365	(4.4%)
7. 食道癌	esophageal cancer	298	(3.6%)
8. 前立腺癌	prostatic cancer	179	(2.1%)
9. 卵巣癌	ovarian cancer	120	(1.4%)
10. 陰茎癌	penile cancer	102	(1.2%)
11. 肝細胞癌	hepatocellular carcinoma	101	(1.2%)

(1979-1997, Total: 8,349)

西ケニア地域(ウェスタン、ニャンザ、リフトバレー州)の風土あるいは自然環境は、北部の高温で乾燥した半砂漠、中央部の冷涼で湿潤な熱帯高地、南部の乾燥したサヴァンナと多彩であり、また、この地域には異なった体質的、歴史的、文化的背景を持つ多くの民族が居住しており、種々の疾患とそれに関与する因子との関連性を知るうえで非常に興味深い地域と言える。

これらを前提として今までの組織学的調査で得た結果(表1, 2)をもとに西ケニアにおける悪性腫瘍の地理的および民族的分布の特徴を説明したいと思う。表1では1979年から1997年の19年間に於ける全悪性腫瘍の、表2では男性および女性での悪性腫瘍の種類、その件数および頻度を示す。

西ケニアでは子宮頸癌、悪性リンパ腫、皮膚癌の件数が最も多く、全悪性腫瘍中に占める頻度も高い。これらの腫瘍が西ケニアにおける3大悪性腫瘍と言えよう。

腫瘍ウィルスの一つ、ヒト・パピローマ・ウィルス感染の関与が強く示唆される子宮頸癌は3大悪性腫瘍の中でも群を抜いて多い腫瘍であり、西ケニアではヴィクトリア湖盆地に住むルオに高い頻度で見られる。子宮頸癌は衛生状態の不良な開発途上国に多く、また若くして性生活を始めたものや売春婦に多いなど衛生環境や性生活との密接な関連性をもつ腫瘍である。

悪性リンパ腫は高温湿潤なヴィクトリア湖盆地に住むルオに多く、その中でもとくに小児の下顎などに特異的に生じ、エプシュタイン・バー・ウィルス感染が原因とされるパーキット・リンパ腫の大半はルオに見られる。同地域は熱帯熱マラリアの蔓延地帯であり、乳幼児期における熱帯熱マラリアの持続感染がエプシュタイン・バー・ウィルスの活性を高め、パーキット・リンパ腫が発症すると考えられる。

淡色の皮膚を持った人種では、紫外線の長期暴露が明らかな誘因となり、顔面、手背などに生じやすい皮膚癌(扁平上皮癌)は、西ケニアでは熱帯高地のカレンジンに多く見られるが、紫外線暴露部に発生する事は少なく、好発部位は下肢、足などの外傷を受けやすく、また常に病原体の浸襲を受けやすい部位である。西ケニアの住民の皮膚は紫外線に対して強い防御力を持っており、難治性皮膚潰瘍などの前病変が扁平上皮癌の発生母地になると考えられる。皮膚癌のなかでもとくに紫外線との因果関係が強い基底細胞癌は、現地に多いアルピノ(白子)に高い頻度で見られる。

皮下組織や筋肉などから生じる悪性腫瘍の総称である悪性軟部組織腫瘍は、西ケニアでは先進諸国とは比較にならないほど高率に見られる腫瘍である。その多くに何らかのウィルス感染の関与が推測されているが、発症機序は明らかではない。西ケニアで最も多い悪性軟部組織腫瘍はカポシ肉腫で、ニャンザ州に住むルオにその多くが発生する。カポシ肉腫は、真に悪性腫瘍なのか、単なる過形成性病変なのかなど、その本態について解明すべき問題の多く残った謎の腫瘍である。カポシ肉腫に次いで多い悪性軟部腫瘍は線維肉腫であり、カレンジンの一派であるナンディヤトゥゲンに多いこと、前胸部や肩の皮膚に多く生じることなどから、ウィルス感染とともに、皮膚装飾のための皮膚切傷などの風俗習慣との関連性も疑われる。

肥満、未経産などを危険因子とする乳癌はリフトバレー州に住むキクユに多く見られる。従来よりアフリカでは男性乳癌が非常に多いと言われており、西ケニアでは全乳癌患者の8%が男性であり、その多くはカレンジンの一派であるキプシギスに見られる。キプシギスでは慢性肝疾患も多く、これによるホルモン異常もその一因と推測される。

その他、西ケニアでの興味深い疾患として、陰茎

表2 西ケニアにおける男性・女性の悪性腫瘍の主な種類、件数および頻度
Numbers and Prevalences of Main Malignant Tumors among male and female in Western Kenya

男性 male	1.	悪性リンパ腫	malignant lymphoma	655	(19.2%)
	2.	皮膚癌	skin cancer	440	(12.9%)
	3.	悪性軟部組織腫瘍	malignant soft tissue tumor	432	(12.7%)
	4.	食道癌	esophageal cancer	208	(6.1%)
	5.	前立腺癌	prostatic cancer	179	(5.3%)
	6.	悪性黒色腫	malignant melanoma	161	(4.7%)
	7.	陰茎癌	penile cancer	102	(3.0%)
	8.	肝細胞癌	hepatocellular carcinoma	70	(2.1%)
(1979-1997, Total: 3,404)					
女性 female	1.	子宮頸癌	uterine cervix cancer	1,805	(38.4%)
	2.	乳癌	breast cancer	523	(11.1%)
	3.	皮膚癌	skin cancer	449	(9.5%)
	4.	悪性リンパ腫	malignant lymphoma	360	(7.7%)
	5.	悪性黒色腫	malignant melanoma	182	(3.9%)
	6.	悪性軟部組織腫瘍	malignant soft tissue tumor	150	(3.2%)
	7.	卵巣癌	ovarian cancer	120	(2.6%)
	8.	食道癌	esophageal cancer	76	(1.6%)
(1979-1997, Total: 4,702)					

癌が挙げられる。陰茎癌は包茎の者に生じることが多く、包皮に付着した恥垢の慢性的な刺激やヒト・パピローマ・ウイルスなどの腫瘍ウイルスの持続感染、非衛生的な生活環境などが原因と考えられており、西ケニアでは割礼の風習を持たないルオとトゥルカナに圧倒的に高い頻度で見られる。男子割礼をおこなわない民族では陰茎癌に比例して子宮頸癌が高率に見られるとの報告もあり、西ケニアでも、前述したように子宮頸癌がルオに多く見られる。

このように、自然環境、社会環境、衛生環境、住民の生活様式、風俗習慣などの多様性が西ケニアにおける様々な悪性腫瘍の発生機序、あるいは発現形態に多彩な影響を与えていると考えられる。また、多くの悪性腫瘍の発癌の過程で腫瘍ウイルスが重要

な関与をなしていることが明らかになりつつある。とくに熱帯地における自然環境、社会的環境はウイルスそのものの生存、ヒトへのウイルスの感染、ヒトでのウイルス由来癌遺伝子の発現など、の面で好適な条件を備えていると考えられる。西ケニアにおける、ヒト、病原体、ヒトと病原体を取り巻く様々な外的要因、との関わり合いはそれによって生じる悪性腫瘍を含む種々の疾患の発生機序、発現形態を究明するうえで、困難ながらも興味深い機会を与えてくれていると言える。

終わりに、1980年代後半より、予測できなかった要因、すなわちエイズの蔓延が同地域の腫瘍地図を徐々に塗り替えつつあることも付け加えておきたい。

Characteristic Ethnogeographic Distributions of Malignant Tumors in Western Kenya

TORIYAMA Kan (Department of Pathology, Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University)

An ethnogeographic variation in the frequency of different types of tumors is mainly attributed to the interplay of varied causative factors such as exposure to ultraviolet light, chemical carcinogens, oncogenic viruses, genetic factors, and cultural practices among various populations. This study analyzed histopathologic specimens in western Kenya with a focus on the following objectives: to examine ethnogeographic distribution and to relate the tumors to putative environmental causative factors. The most common malignant tumor was cervical cancer, which is more prevalent among the Luo in Nyan-

za Province, followed by malignant lymphoma also among the Luo in Nyanza Province, and squamous cell carcinoma of the skin among the Kalenjin in Rift Valley Province. In addition, several malignant tumors such as Kaposi's sarcoma, penile cancer and other tumors showed characteristic ethnogeographic distribution. These findings suggest that environmental factors, including oncogenic viruses, and/or cultural practices seem to play a role in the development of malignant tumors in western Kenya.

笑顔のすてきな人だった。一見こわもてのヒゲが笑うととてもやさしくなった。「君は、意外にオーソドックスだね」。それが1981年にナイロビ空港に降り立った安部さんの最初の言葉だった。長らくアジアで調査されていた安部さんはどこでそういう印象をもったのか、アフリカ研究者たちはみな風変わりで、とっつきにくい人たちがばかりと思っていたようだ。私はその時、ちよびりうれしいような、くやしいような気がしたことを覚えている。

ICIPEでシロアリの生態調査をはじめた安部さんは、それからナイロビ学振オフィスの「大事な顔」になった。きさくな笑顔で誰にもシロアリの話をしてくれ、興味のある様子をみせればアンボセリ国立公園近くの調査地に連れて行って実際に見せてくれることもあった。どこでも出かけて行ってシロアリ塚を掘りまくり、話をすると「シロアリならね…」と何でもシロアリのことに摺り替えてしまう情熱ぶりだった。私は研究者魂というものを安部さんに教えていただいたと思う。

今井一郎さんが交通事故で意識不明になって入院した時の活躍ぶりは今でも忘れられない。「ぼくはこんなことしかできないから」と言ってじつと電話の前にすわり、日本や関係各機関との連絡に沈着冷静な対応をされた。まさに隠れた司令塔の役割を果たして下さったと感謝している。

安部さん、松田素二さん、私の3人でザイルへ旅行した時のこともなつかしい思い出。陸路をウガンダ、ルワンダとひた走り、シロアリ塚を見つけると車を止めて御満悦だった安部さんは、フランス語圏に入るとしだいに無口になった。かつてパリにしばらく滞在したことのある安部さんは「フランス語ならぼくにまかせてくれよ」と言っていたのに、どうにも言葉が出てこない。ザイルの首都キンシャサに着いた頃はほぼ完全に失語症になっていた。どこでもあのやさしい笑顔と目で会話をする安部さんの横で、松田さんと私は大活躍をしたのだが安部さんは私の印象を変えただろうか。とうとうそれを聞けないうちに、安部さんは逝ってしまわれた。

今年の3月末、カリフォルニア沖の島で調査中、海難事故に遭われたのだ。4月からは京都大学生態学研究センターの所長に就任することが決まっていた。早すぎる死だった。アフリカには1980年代半ば以来もどってこれなかったが安部さんの笑顔と研究を愛する魂はきっとアフリカに残っていると私は信じている。いつか思わぬ形で安部さんが残したものに会えるかも知れない。安部さん、安らかに眠り下さい。 山極寿一(京都大学大学院理学研究科)

Professor ABE Takuya: 1945-2000, Ecologist, Professor of Center for Ecological Research, Kyoto University, was our guest in 1981 directed by then Mr. YAMAGIWA, as a research fellow to ICIPE, an Associate Professor of University of the Ryukyus at that time, for 10 months on termite ecology, who is one of the three Japanese ecologists died accidentally in Gulf of California near Bahia de los Angeles, Mexico on 27 March 2000.

"You look surprisingly orthodox", Professor ABE Takuya said to me when he arrived at Jomo Kenyatta Airport for the first time in 1981. His large mustache gave him a tough look, but his smile showed his kind heart. I don't know where he got his ideas about Japanese researchers in Africa, but he probably thought that they should all be eccentric and difficult to get along with. His words both amused and vexed me.

Prof. ABE began his ecological survey on termites at The International Centre of Insect Physiology and Ecology (ICIPE), and soon became one of the influential and welcome visitors in our Nairobi JSPS office. He would talk to anybody about his termites with a friendly smile, and would even take people to his field site near Amboseli National Park to show them real termites. He always found a way to turn the conversation back to the topic of termites, saying, "In the case of termites..." From his example, we learned a lot about the dedication and enthusiasm of a true field researcher.

I will never forget his actions when the anthropologist Dr. IMAI Ichiro was hospitalized in Nairobi after a traffic accident in 1981. "This is all I can do for him now," he said, sitting down next to the telephone. He then began contacting various concerned people and institutions, including those in Japan. With his calm manner, he was the hidden control tower behind the efforts to help Dr. IMAI.

A trip to Zaire with Prof. ABE and Mr. MATSUDA Motoji, a Japanese social anthropologist, is also among my good memories of Prof. ABE. We drove through Uganda and Rwanda en route to Zaire. Prof. ABE stopped the car for every termite mound on the way to Zaire, and was always very happy to get out of the car and examine them. Although he was proud of his French-speaking abilities, he became quieter and quieter after we entered the Franco-phone countries. By the time we arrived at Kinshasa, the capital city of Zaire, it was if he had completely lost the ability to speak. He looked wordlessly at the people of Kinshasa with his beautiful smile, while Matsuda and I were forced to demonstrate our ability to survive in a place where English was poorly understood.

I regret that I missed my chance to ask Prof. ABE whether he ever changed his first impression of me. He has left us forever. It is with great sadness that I must inform you that Prof. ABE suffered a fatal accident in the Gulf of California at the end of March, 2000. He was to be assigned the post of Director of Center for Ecological Research at Kyoto University this April. Although he had not returned to Africa since the middle 1980's, I believe that his smile and the spirit of his field work remain here still, and I expect to encounter those things Prof. ABE left us here for us in Africa in the future. May he rest in peace.

YAMAGIWA Juichi, Graduate School of Science, Kyoto University

Translated by TAKAKI Misa

センター行事 Meetings, Events

4JY/April

- 1 巻島美幸長期派遣研究員任期延長(2001年3月末まで)
- 3 巻島一時帰国
- 20 京都大学アフリカ地域研究資料センター田中二郎教授とナイロビセンター運営について意見交換
- 27 巻島ケニア帰着

5JY/May

- 17 東京本部より国際情報課相原重昭課長、経理課川村次郎係長ナイロビセンター訪問(19日まで)。
18日ケニア国立博物館(National Museums of Kenya) Dr. George Abungu館長と会見、教育部
門のMr. Fredrick Karanja Mirara, JICA菊池弥生専門家と会見。19日国際昆虫生理生態研究センター
(International Centre of Insect Physiology and Ecology) 訪問、中村達博士よりICIPEの現状の説明

6JY/June

- 3 内海成治短期派遣研究員(大阪大学人間科学部)着任
- 5 日本広報文化センター池田博次所長(日本大使館)とケニアにおける日本の文化学術交流について意見交換
- 15 巻島、北ケニアNacholaへ調査(19日まで)

センター往来 Visitors

4JY/April

- 3 内海成治 UTSUMI Seiji (大阪大学 Osaka University)
- 7 平田秀嗣 HIRATA Hidetsugu (トーマン Tomen)
- 12 山内弘美 YAMAUCHI Hiromi (JICA Social Forestry Extension Model Development Project for Semi-Arid Areas)
- 14 Cassim Ochibah (University of Nairobi)
- 18 Vincent J. O. Muoma (Kenyatta University), Catherine Lukhoba (University of Nairobi)
- 28 秋吉博之 AKIYOSHI Hiroyuki (神戸大学 Kobe University / JICA Strengthening of Mathematics and Science in Secondary Schools Project)

5JY/May

- 10 孫曉剛 SUN Xiaogang (筑波大学 University of Tsukuba)
- 10 石原聡 ISHIARA Satoshi (Association of Medical Doctors of Asia / London University)
- 本多喜貞 HONDA Yoshikazu (国際家畜研究所 International Livestock Research Institute)
- 12 荻ノ迫善六 OGINOSAKO Zenroku (国際農林学研究所 International Centre for Research in Agroforestry)
- 18 相原重昭 AIHARA Shigeaki (日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science)
- 川村次郎 KAWAMURA Jiro (日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science)
- 25 John N. Mbitu (National Museums of Kenya)
- 27 Ambrose Ichom, Raseann Wambogo, Kate Njeri (Egerton University)

6JY/June

- 6 大津一美 OTSU Kazuyoshi (IGS Afric)
- 9 前田美子 MAEDA Mitsuko (大阪大学 Osaka University)
- 15 井上裕幸 INOUE Hiroyuki (文部省教育文化交流室 Ministry of Education, Science, Sports and Culture - Monbusho)
- 19 皆川昇 MINAKAWA Noboru (国際昆虫生理生態研究センター International Centre of Insect Physiology and Ecology)
- 29 菊池弥生 KIKUCHI Yayoi (National Museums of Kenya / JICA)
- 30 Paul Curzon (Central Testing Laboratories)

「ヒダド・ママ」の復活

～レンディーレと暮らして見えてきたこと～

菊地美貴子（筑波大学大学院環境科学研究科）

19 レンディーレと暮らす
98年8月から2000年1月までの間、私は二度ケニアに渡り、総計すると約10ヶ月間レンディーレの村に住み込んだ。レンディーレとは北ケニアの半砂漠地帯を生活圏とする、ラクダ遊牧民である。私が暮らした村は、マルサビット県南部のカイスート砂漠の真ん中、コル(Korr)という地図にも載っていない町から10キロほど離れたところにあった。

砂漠の真ん中といっても村から3キロほど離れたところに手押し式のポンプがあり、村の女性たちは毎日水汲みに行く。私も彼女たちに混じって時々水汲みに行った。確かに空気は乾いていたが、水の不便はそれほど感じなかった。

レンディーレは、ラクダをメインに、ヤギ、ヒツジとウシ、そしてロバを飼っている。乾燥に対する抵抗性や食性の違いといった、それぞれの家畜の特徴に応じて、独特の放牧様式を発展させてきた人々である。例えば乾燥に強いラクダは、多くの場合村からは離れた場所で、青年戦士たちが専断的にキャンプで放牧管理をする。ラクダが必要とするものと、人間が必要とするものが違うため、村とキャンプは別々の場所に作られることになる。

というわけで、村に住み込んで、「女ならではの視点」に心のどこかでこだわっていた私は、ラクダ遊牧民と暮らしていたと威張れるほどにはラクダのことを知らない。村での日常生活には、ラクダは直接関わるものがほとんどないのである。かわりに村にいるのは、搾乳するために村に残された、数頭のヤギやヒツジ、ウシだけなので、村の中に家畜の大群がいる風景が見られるのは、稀である。

もちろん、雨季となれば話は違ってくる。雨が降れば家畜キャンプは村に戻され、村が家畜の鳴き声で賑やかになる。搾乳量も格段に増え、村で飼われている

犬さえミルクに飽きるほどになるという。私自身は、幸か不幸かそんな事態には出会うことはなかったが。

レンディーレは畜産物(ミルク・血・肉)を主食としている。もちろん、家畜はいつも村にいるわけではないので、彼らはメイズ粉や粒を街で買い、体に良いと彼らが信じて疑わない植物油をかけて、日々の食事としている。当然、味なんて二の次だし、栄養バランスが良いとも言い難い。当然、そんな食生活に耐えられない人々がいる。私の「母」が、そんな人だった。

「ヒダド」の誕生

私はレンディーレ・ランドでは、「ヒダド Hidado」と呼ばれている。私のレンディーレ・ネームである。これはレンディーレの間では比較的ポピュラーな名前、**「砂漠(Hidad)で生まれた娘」という意味だ**そうである。私が彼らの村に初めて滞在した時、村の長老が私にこの名を付けてくれた。それ以来、私は村人から「ヒダド」と呼ばれ、「お前の名は何だ？」と聞かれる度に「ヒダド」と答えるようになった。

人々は名前を聞くだけでは気が済まない。所属クランを聞かれ、母の出身クランまで聞かれる。レンディーレは父系社会、つまり父親のファミリー名を踏襲していく社会なのであるが、冗長な挨拶に混じって必ず母のことを聞かれる。所属クラン(父系クラン)が縦系とすれば、母方クランが横系となって個人が同定されていく。見た目はどうしたってレンディーレではありえない私に対しても、冗談なのか本気なのか、そういった人物同定のための身上調査的挨拶は繰り返された。私はいつも悪びれもせず、冗談でもなく、「私の名はヒダド」と答えたものである。ある人は、レンディーレ語を操る不思議な白人の娘に興味を抱き、ある人は「レンディーレがこんなに色が白いわけではないでしょう」と怒ったりもした。私はその度に、実はその場に適切な対応していた。たとえ彼らがレンディーレ語を

しゃべる私を多少認めたととしても、私を本物のレンディーレと思っているわけではないことは明らかだったし、本気で怒る人の気持ちもわからなくなはなかったから。ただ、私の「家族」は少し違っていった。

私は村のある長老の妹として、彼らの村に住み込んでいた。父はいなかったが、長兄が私にとっては父的役割を果たす保護者であった。実際に彼は50歳をとうに過ぎていて、私の年齢からいっても「父」と呼ぶに相應しい人だったが、私は彼を「兄さん」と呼んでいた。彼の母親はいまだ健在で、私は成り行き上彼女を「母」と呼ぶようになった。

母は少々エキセントリックな人である。簡単にいえばキレやすい。自分の小屋の中から物がなくなったといっちは、「誰がいったい盗んだの？」と大騒ぎである。実際には自分でしまい忘れていたことがほとんどなのだが、「自分が忘れるわけがない」と思い込んでいる。探し物が見つかる、怒りはすぐに過ぎ去り、自分が主張していたことも即忘れてしまうような人である。そんな彼女は、私が彼女の末娘になった時も、さしたる感動もなさそうだった。ただ、誰よりも私をレンディーレとして扱おうとする。言葉ができなかった頃から一貫して、母の私に対する態度は変わらない。すなわち、普通に母が娘に接する態度、である。

例えば、私は家の仕事をさぼっていると、いつも母に叱られる。私くらいの年齢の未婚の女は、放牧キャンプにいれば家畜の世話をし、村にいれば自分の家のみならず近隣の奥様方までサポートする、貴重な労働力なのである。だから、兄嫁の留守中に、兄の家の炉の火が落ちていたり、彼女の子どもが泣いていれば、それは(私の母にとっては)「ヒダドがさぼっている」ということになってしまうのである。私も自分の家にかかりきりになるわけにはいかないので、これにはまったく辟易した。

ヒダド・ママのわがまま

そんな元気で頑固な母も、2年目に私が村を訪れた時にはすっかり弱ってしまっていた。彼女は自分で水汲みにも薪集めにも行けなくなっていたし、食事の準備もすべて兄嫁がやっていた。兄嫁は「まったく、お義母さんには困っているの。自分では何もできなくせに、私のやることには文句ばかり」と私に愚痴をこぼすのだが、それが日本でもありそうなことに思えて、私はなんとなくおかしかった。

母の文句は食べ物に集中していた。「トウモロコシもウガリも食べたくない。歯がないのに、どうやって食

べろっていの？ ミルクが飲みたい。他のものは何も要らない」

私は毎日彼女のためにミルクを買うことにした。私の村には当時ウシが一頭もおらず、したがってミルクを分けてくれるような人もいなかった。そこで、ミルクを分けてくれるという隣村で買い求めることにした。時々「ヤギをつぶしてちょうだい」と母は言った。兄がヤギをつぶした。けれど、母は、いざつぶしてみると気が変わるらしく、肉はおろか、病人にはいいと言われるヤギ肉の水煮スープさえ、飲もうとしないのである。

兄と私は相談して、我々の母をヤギ・キャンプへ連れて行くことにした。村にいても何もできない母は、せめて家畜の近くにいたほうが幸せなものなのではないだろうかと思ったのである。我が家のヤギ・キャンプは村から50キロほど離れた所にあつたので、私が母を車に乗せてキャンプまで送りどけた。本人は歩いていくと言いつつ張ったが、水汲みにもいけないのにそんな距離を歩けるわけではない。

母は喜んでキャンプに移ったわけではなかった。老人がキャンプに移ることは珍しくないが、それはミルクが豊富な時期のこと。その時はまだ乾季が続いており、ほとんどの小家畜キャンプでもウガリを食べているような状況だった。それでも雨が降らない兆しが無いわけではなかった。なんとかかなるだろうと適当に判断したのである。

母をキャンプに置き去りにする時、「一週間くらいしたらまた来るから」と言っておいた。そしてびったり一週間後、私は母の様子を見に行つた。キャンプでも手が負えないようなら、村に連れて帰るつもりだった。ところが母は、私を見て「あれ？ いったい何をしにきたの？」などと言うのである。「迎えに来たんだよ」と私が言うと、「帰らないよ。ここにいる。ミルクを飲んでいたら調子が良くなってね」と以前の弱っていた様子がウソのように、元気に動き回っている。

きつねにつままれたような気分で、再び母を置き去りにした。たった一週間で、そんなに回復するものだろうか？ 村に戻ると、母を連れ帰らなかった理由を聞かれた。私がこれこれこうだと説明すると、「やっぱりねえ。レンディーレはそういうものだよ」と笑われた。兄も「あの人はもう放っておいても大丈夫だよ。村に戻りたければ、歩いて帰ってくるし、キャンプにいたければずっといるだろう」と言う。私一人が心配し過ぎていたらしく、「そんなものかなのか」と心の中で思った。

しばらくして、兄の言うとおりに、母は歩いて村に戻ってきた。いつの間にか母はウシ・キャンプに移っていたらしく、ウシの移動について村近くまで来たついでに、荷物をとりに戻ただけだという。母は自分の小屋でお茶を飲んだ後、当たり前のようにウシ・キャンプの移動についていった。

キャンプへ

ウシ・キャンプが私の村を通り過ぎた後、村の人口が激減した。ウシ・キャンプが向かった地域は雨が降っており、ウシだけでなくラクダやヤギ・ヒツジのキャンプも集中する地域のように、村の大半の人間が、ミルクを求めてキャンプについていったのだ。残ったのは、乳飲み子とその母親、そして移動生活をするには衰え過ぎた老人たちであった。小屋を無人にするわけにはいかないので、仕方無しに残ったという人の話も聞いた。

私も人気のなくなった村にいても仕方ないので、キャンプへ向かうことにした。キャンプは、時に車でアプローチ不可能な所に作られる。この時がそういう時であった。私と兄はロバを用意して、必要な水を積み、早朝、村を出た。

村を出てしばらくは、おなじみの半砂漠地の風景が続く。10キロほど砂地を歩くと、溶岩地帯に入り、見渡す限り岩ばかりの風景が20キロ近くも続く。が、それを通り過ぎると風景は一転して、緑の楽園になる。そこには、レンディーレのみならず、他の遊牧民の家畜キャンプも点在しているようだった。私はここで、村がそのまま引っ越してきたのではないかと思うくらいに、私の村の人々に出会った。

私たちはひとまず兄のウシのいるキャンプ、つまり母のいるキャンプへと向かった。村からキャンプに行く者は、情報も運んで行くものである。私はキャンプの長老たちに、ひとしきり村の近況を伝えたり、その日のサファリの苦労話などをして盛り上がっていた。そうしたら、いつもの母の機が飛んできたのである。「ヒダド、いつまでもおしゃべりしてないで、手伝いなさい」

母の教え

時刻はちょうど夕方。放牧に出ていたウシがキャンプに戻ってくる頃だった。母は長老たちのためにチャイを入れたり、乳容器の消毒をやりたりと、忙しそうであった。それだけでなく、キャンプにいる5～6人の5歳前後の子供たちに、乳容器の消毒の仕

方を教えたり、横着な子どもをしつけれたりもしているようだった。

レンディーレの子どもは、5歳くらいから小家畜の幼獣の世話を始め、経験を積んで15歳くらいで一人前の牧童になる。キャンプで母に叱られていた子供たちは、生まれて始めて母親のもとを離れ、家畜キャンプにデビューしたばかりであった。デビューしたとはいえ、年齢的にも経験からいっても、仔ウシの世話さえできない子ども達である。それでも遊んでいていいわけではなくて、こうやって叱られながらキャンプでの作法を学んでいくのだった。私の母も放牧には直接関わらないものの、教育係としての役割を果たしている。子供たちの中には、もちろん彼女の孫もいた。

忙しく動き回っている母は、村を出た頃よりも更に元気が良くなっていた。肌までつやつやになったような気がする。これがミルクの力なのか、家畜の近くにいると元気が出るのか、「役割を果たしている」という精神的充足から来るのかはよくわからないが、とにかく私は、元気になった母を見て嬉しくもあり、またレンディーレの底力のようなものを感じたのである。

年老いてもなお現役の母にも感嘆したが、5歳で母のもとから離れてきた子供たちにも、「立派なものだなあ」と思わざるを得なかった。「村に帰りたくないの？」と私が子どもの一人に聞くと、「村に帰って何をやるの？ 僕は、ここで仔ウシの世話をし、そして将来は立派な戦士になるんだよ」とさも当たり前のように答えた。あっぱれである。

これから遊牧人生を歩み出す子供たちと、それを生き抜いてきた老人が、同じ風景の中にいるということが、この社会では当たり前のことにあるには違いないが、それを目の当たりにできたことに、私は感謝している。レンディーレ社会で暮らした短い時間の中で、「家畜と共に生きる」ということを少しでも実感できたのは、この母を見ていたからかもしれない。そして、日本で生まれ育った私が、「家畜と共に生きる」ということを理解するのはとても難しいし、理解できるはずもないのかもしれないということも、あらためて思わされた。レンディーレの一人の老女は、多くのことを私に教えてくれたように思う。やはり、母は偉大なり、なのである。 □

旱魃による諸制限

大雨期の降水量が記録的に少なかったため、各種制限が始まっています。

1. 電力供給制限

水力発電所貯水池の水位低下のため電力の供給制限が強化されます。

尚、幸いなことにナイロビ大学 Chiromo Campus はこの対象から外れておりますので、隣接の当センターも現在のところは日中も電力が供給されております。ただ、発電機を用意し不測の事態に備えております。

週3回、半日の制限は以前から行われてきました(「ふくた一な14号」既報)が、雨期に入っても一向に雨が降らないことから、貯水量の減少は止まらず、次の小雨期まではこの制限は続くものと予想されます。

2. 給水制限

上水道貯水池の水位低下のため、Nairobi City Council による水道の給水制限が行われています。

参考 Nation 掲載のKPLCの社告

Daily Nation Thursday, May 25, 2000

The Kenya Power and Lighting Co. Ltd.

Programmed power interruption

Following persistent drought in the country and the failure of the long rains in 2000, it has become necessary to further reduce hydropower generation at KenGen's dams in order to conserve available water to take the country until October/November when the short rains are expected. As a result, KPLC will experience a supply shortfall of 352 MW during the day and 160 MW during the night. Customers' supply will therefore be interrupted from Monday, 29th May 2000 as detailed below until further notice.

(区域名など省略)

抗マラリア薬最新情報

今まで紹介しておりましたCotecxin単体での治療は(耐性株の出現により)効果が徐々に弱まっているようですので御注意下さい

Supervised by Dr. O. S. Dogra of Kamburu Drive Clinic and Dr. KUROSU Yoshiharu in Embassy of Japan

1. 予防処方(その1またはその2を選択)

a. その1(予防率60-70%)

proguanilとdoxycyclineの併用

proguanilを

汚染地に入る1週間前から 毎日1錠

汚染地に入ったら 毎日2錠

汚染地を出てから4週間 毎日1錠

doxycycline(1カプセル100mg)を

汚染地に入る1週間前から

汚染地を出て4週間後まで 毎日1カプセル

b. その2(予防率95-98%)

mefloquine(1錠250mg)

汚染地に入る1週間前から

汚染地を出て4週間後まで 毎週1錠

2. 治療法(熱帯熱マラリアに対して)

Coartemとdoxycyclineの併用が現在最も効果がある

Coartem(artemetherとlumefantrinの合剤)を

初回 4錠

12時間後に 4錠

その24時間後に 4錠

更に48時間後に 4錠、計16錠

doxycycline(1カプセル100mg)を

毎日1錠、7日ないし10日間

3. 商品名・副作用

proguanil = Paludrine

重篤なものは少ない

doxycycline = Doxyline, Vibramycin

吐き気、めまい、16歳以下には処方不可(歯への色素沈着)

mefloquine = Mephaquin, Lariam

幻覚(悪夢)、眩暈、吐き気、頭痛、食欲減退、倦怠感

編集後記

ナイロビの涼しさに憧れて赴任いたしました。はじめてセンターに来た日には5匹の犬に吠えられ、1匹の猫に懐かれ、驚きました。いつのまにか2ヵ月半が経過して、犬は吠えなくなり、猫は姿を見たら逃げて行くようになりました◆この2ヵ月半、来て早々に巻島君の車の事故があったくらいで、どちらかというと平穏無事だったように思います。センターにおいて下さる先生、大学院生の皆さんから調査の話をうかがうのを楽しみにしています。人類学や言語学の門外漢に取って面白い話ばかりです◆国際教育協力論と名付けて教育分野の国際協力を研究しています。アフリカ研究の中では教育は非常にマイナーな分野ですが、国際協力では重要な分野です。地域研究、人類学研究成果を学びながらアフリカの教育について考えていきたいと思っています。学生にいつも学際的なアプローチが必要だと言っていたのですが、ここに来て学際的な研究には学際的に食事をし、酒を飲むことが大切だと知りました◆センターの業務はベテランの巻島君に任せて、ナロックの2つのマサイの小学校に何日か通いました。日掃りの調査ですが、ホコリにまみ

れての調査は久しぶりです。250人の生徒にインタビューをして、写真を撮りました。これから生徒一人一人をフォローして、マサイの社会における近代的学校のありかたを考えたいと思っています。ほんの少し土ほこりの向こうに影が見えてきた感じですよ(内海)

長崎大学の鳥山さんには疫学調査の20年の蓄積、調査継続の成果をご覧ください◆筑波大学の菊地さんには遊牧民の村の生活。フィールドワークの風景◆二昔前のナイロビ学振の顔としていろいろエピソードの伝わる安部琢哉さんの追悼記事は、当時駐在員の山極さん◆いつもより増量の10頁でお届けします◆最近のナイロビ在住の日本人同士の挨拶「そちらに電気や水は来ていますか」◆今までの駐在員とは専門が大きく違う内海さんを迎え、学振ナイロビの新境地を作りたいことを願いつつ来たる繁忙期を迎えます◆私事ですが、6月19日の調査地Nacholaでの事故については、多くの方にご迷惑をお掛けし、また助けていただきました。ここにお詫びと感謝を申し上げます(巻島)

Hukutana No. 15

Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi

Issued: 30th June 2000

Editor: UTSUMI Seiji and MAKISHIMA Haruyuki

Publisher: JSPS Research Station, Nairobi, KENYA

Printer: Jarolin Enterprises, Nairobi, KENYA

For rights of reproduction, application should be made to the JSPS Research Station, Nairobi. The views expressed in the articles of this bulletin are those of the contributors and do not necessarily reflect the views of Japan Society for the Promotion of Science.

ふくたな◇第15号

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュース

発行日◇2000年6月30日

編集・発行者◇内海成治・巻島美幸

発行所◇日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

本誌の掲載記事を転載する場合は、事前にセンターまでご連絡下さい。本誌の中で署名のある記事についてはそれぞれの主張・意見は執筆者個人のもので、日本学術振興会の見解を反映するものではありません。

© 2000 Japan Society for the Promotion of Science, Research Station Nairobi. All rights reserved. Phone: +254-2-442424; Fax: +254-2-442112; e-mail:jpsst@africaonline.co.ke

JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE,

RESEARCH STATION NAIROBI

P. O. Box 14958

NAIROBI, KENYA

PAR AVION
VIA AIR MAIL